未来ある明日へ～求める者～

路地裏の黒猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
未来ある明日へ～求める者～

【Ｎコード】
Ｎ２４８８Ｘ

【作者名】
路地裏の黒猫

【あらすじ】
彼は落ちていく。
もう一つの世界へ。

彼、修治は、女神の失敗により異世界へと堕ちた。
記憶を失い。

彼の地で彼は求める。
自らの記憶と、傍にいてくれた彼女の体を。

しかし、彼の脳裏は時折見知らぬ少女の姿が見えた。

この物語は、前作未来ある明日への改訂版です。

序章　失われたもの、手にしたもの。

世界と世界。
異なる理からなる別の世界、異次元や異世界。
そういう物。

それらはそれぞれ寄り添い合い、まるで意思をもつ者達のように互いに与え、奪い合いバランスを保ち其処にあった。

双子の世界。

この物語は数多ある世界の中の二つの世界。
一番近く、一番遠い世界。

そして、その世界を見守り正しき進化を進めるための管理する者達がいる。
彼らの名は無い。

彼らは常に其処に在って、其処に無い存在。
知覚しようにも、存在している場所が違う、次元が違う。
3次元のものが2次元のものと触れ合うことが出来ないのと同じく。
到底不可能のはずだった。

しかし、彼らの中にも時間という概念は存在する。
世界は成長し、滞り、腐敗する。
世界は生きている。

崩れ去る世界を観測し、新たな世界を創造するとき観測結果を本にし、滅んだ世界をよりよい世界へと導く。

成長させ進化させるために、時間という概念を持つべくして持った。
時間という概念は、思わぬ結果を観測者達に齎した。

それは、世界の進化を見守り続け幾億の時間を生きた彼らにも、成長を、進化を齎したのだ。
世界は日々変革し、同じ物は一つとして存在していない。

それは、はじめ一つの観測者としての意識、概念しかなかった彼に。
いや、彼らに様々な色を付けた。

世界を創る者。
創られた世界を見守り、導く者。
そうした者達に作られ、世界に住まい世界を支える者達。

漠然とした意識の個から確固たる意思、思想を持った個。

それぞれの個性を持った者達が生まれ始めた。

創造を。
維持を。
変革を。
破壊を。
癒しを。
新たな明日を夢見る者を。

世界の外で、途方も無い時間の中で彼らは世界を見守る。
間違えば修正を、壊れれば施しを。

どうしようもないときは、破壊し、残骸で新たな世界の息吹を。

数多の世界が生まれ消えていく中、新たな意識が、想いが生まれた。

“この世界を守りたい”

どんなに腐ってきていても、穢れてきていても。
壊してしまうということはできない。
何故なら、世界は生きているから。

産まれ、育て、死んで、又生まれる。

意思があり。
心があり。
愛憎が産まれ。
創り、壊し。

繰り返す瞬間（とき）の輝きが世界にはある。
その世界を、ただ失敗したという理由で壊すことは出来ない。

守りたい。

そう願う者達が生まれた。
そうした願いを持ってしても、最高意思には逆らえない。

“進化を、そしてその先を”

守りたい、そう願う者達は世界に触れた。
自らの声に耐えうる素質のある者を探した。

あるときは、自ら手を加えようともした。
しかし。

世界は滅びる。
幾たびも幾たびも。
その度に彼女たちは涙を流し、残骸を集め新しく息吹く世界を思う。
双子世界。

今、目の前の世界は寄り添いあいながらも、まったく違う進化を遂げていた。
が、停滞し、腐敗し始めていた。
ゆっくりゆっくり、壊れ始めていた。

そして、観測者にも変化があった。
世界の住人の侵入。
および、最高意思との邂逅。

進化のための新たなる礎として。
誘導した。
彼らの世界は滅び伝説なって、今の双子世界の片割れに極僅か面影を残した。

彼らは伝説の【勇者】として語り告がれている。

これから始まる物語は、数多の世界の物語。

観測者達。
後に、世界の住民達から、神と名を付けられた者達の物語。
女神達の物語。

双子世界の片割れの物語。
双子世界の伝説の残る世界の物語。

この物語に、形は無く。
ゆえに、終わりも無い。
世界は続く、未来ある明日へと。

“私”が語るのは、双子世界を取り巻く神と名づけられた者達と、
世界の住人達の物語。
数多の世界の進化の先の双子世界。

例に漏れず、最高意思、大神の決定により滅びが決定された世界。
その決定に異を唱える、守りたい者達、女神。

そして、女神の意思によって世界は繋げられ“彼”は片割れの世界へ堕ちる。
それは女神の願いではなく、失敗によるものだった。

世界と世界の狭間、異界。

それは、世界でも、意識ある者達の庭でもない。
棄てられた世界の残骸や、意思の転がる世界。

彼は落ちた、それを助けようとする女神がいた。
名前はレクルゥア。

時空神の名を冠する、上位の女神。

“私”は少々語りすぎたやもしれぬ。
後は、彼らに任せよう。
何故なら、物語を読む“私”は物語を作ることは出来ないのだから。
彼らがつむぎだす世界の物語。

未来ある明日へ。

とくとごらんあれ。

序章　失われたもの、手にしたもの。（後書き）

新たな、未来ある明日へをよろしくお願いします。

日常・離れる手。（前書き）

この物語は、未来ある明日へ（オルガニスト）の改訂版です。
ほぼ同一の無いようですがご了承ください。

日常・離れる手。

携帯の目覚ましが鳴り、手探りで探して止める。
朝5時、まだ外は薄暗い。
肌寒い朝、少し伸びすぎた髪を弄りながら布団から起きる。
侵入していた猫が急に布団の外の冷たい空気に晒されて、恨めしそうに見つめる目を向けてくる。

「朝飯だぞ」

布団から出て、足元にあるキャットフードの袋を手に取りがさがさ鳴らしながら、声をかけるとにゃーと返事をする、まぁ急に起こされて憎まれ口を言っているように見えるのはご愛嬌だ。
台所へ行き、ファンヒータの電源を入れる。
息が白い。
床が冷たい。

足もとに猫が擦り寄ってくる。
餌をやるときしか擦り寄ってこない。

朝食を食べて、出勤。
車のタイミングベルトだろうか、きゅるきゅるきゅると耳障りな音がしている。
地面はところどころ凍っていて、周囲の木々は霜で白く彩られている。
暖気をしていないせいで、車内もかなり寒い。
会社に着く頃にやっと暖房が効いてくる。

会社に着き仕事をこなして１２時半頃。
午前中の仕事を終わらせた。

「昼飯に行きまーす。」

汚れている手を更に汚れている作業着で拭う。
当然のことながら黒く汚れてしまった。

「おう。」

日報に記入をしている上司が鷹揚に答えた。

いつもと変わらない作業場。
いつもと同じように、過ぎて行く日常。

しかし、今日は違っていた。

自分と上司が並んで立っているそのちょうどその間、高さは胸の辺りだろうか真っ黒な小さな球体が現れた、目の錯覚ではなく実際にそこに浮いている。

上司も怪訝な顔をして、何だこれは、という顔でこちらを見ている。
首を傾げ自分には分らないと、ゼスチャーで答える。
ほんの数秒、互いの顔を見ていると黒い球体に異変が起きた。
球体に小さな工具が引き寄せられていた。
埃が舞い、球体に吸い込まれていく。
しだいに、引き寄せる力が強まりついには、体さえも引き寄せられ始めた。

上司が、球体に向かって行く日報を掴もうと手を伸ばすが、バランスを崩し球体に引き寄せられる。

「うわっ。」

机にしがみ付く、机の上のペン立や分厚い説明書までもが引き寄せられ吸い込まれていった。

徐々に大きくなる球体、引き寄せる力も次第に増大していく。
上司が徐々に引き寄せられ始めた机に、必死にしがみ付きながら、俺に問いかける。

「なんなんだこれは！？」

俺が聞きたいくらいだ。

「知りませんよこんな物！」

体が引き寄せられ、つかむ場所がない自分はしゃがみこみ耐える。
徐々に体が引き寄せられる、どうしようもない。
少しずつ、少しずつ体が引き寄せられる。
徐々に恐怖が膨らんでくる。
心臓の鼓動が早くなる。

足を突っ張り引きずられまいと必死になる。
俺の状態を見た、上司が叫ぶ。

「くそっ、誰か来てくれーー！！。」

だが、今の時間ほとんどの従業員は昼休憩で、作業場には居なかっ

た。

「だめだ引っ張られるっ・・・踏ん張りがきかねぇしっ・・・。」

「踏ん張れ、すぐ人が来る腹ばいになって耐えるんだ！」

腹ばいに・・・だめだ、少しでも足から力を抜くと、引き寄せられる速度が増す。

ズリッズリッと少しずつ球体へ吸い寄せられる。

「少しでも動いたら、駄目っぽいですっ・・・・。」

それを聞いた上司が、自分も引き寄せられながらも俺に手を伸ばす。

距離は1メートルぐらい。

「つかまるんだ、手を伸ばせっ・・・。」

つかむところが何もない自分はどうしようも無かった。

体が浮いた。

体が流される、上司との距離が一気に縮まる。

手を伸ばす。

「手をっ！」

必死に手を伸ばし手をつかむ。

かろうじて、掴むことが出来た。

しかし、手は汗ばみ徐々にすべる。

「何なんだこれはっ！何なんだよ！！」

辛うじて両足は床についているが、心もとない。

しかも吸い寄せる力は確実に強くなっている。
恐怖がジワリと心に滲んでくる。
吸い込まれれば、死ぬ？
俺は死んでしまうのか？

シニタクナイ

恐らくかなりひどい表情をしているのだろう、上司の顔が強張り自分の命を繋ぎ止めている掌にさらに力がこもる。
床から足が離れそうになる、踏ん張りが徐々に利かなくなる、手が痺れてくる。
近くにあった工具、資材が球体に音も無く飲まれ消えていく。

「手が・・・・すべる・・っ。」
「放すなよっ・・・・！もう少し、もう少しすれば・・・収まる、頑張れっ・・・・！。」

上司が今まで見たことの無いような必死の形相で、掌に力を込める。

「・・・・っ！。」

もはや声も発する余裕も無く、次第に限界が見えてくる。
しかし急に球体がぶれた。
一瞬大きくなり、俺の体だけを飲み込んだ。
引き寄せる力は急に無くなり、宙に浮き球体に引き寄せられていた物はすべて床に落ちた。

「・・・・・・・・・・・・・。」

そこには、さっきまで確かに掴んでいた筈の手が無く、助けを求めていたであろう部下が球体に飲まれ消えた。

まるで初めからそこには、誰もいなかったように。
まるで初めからそこで、何も無かったかのように。

資材などが散乱し、かなり散かってはいるが見慣れた作業場で。
そこに確かに居たはずの部下は忽然と消えていた。
掴むため伸ばした右腕を伸ばした状態で動けなかった。

掌からすべり落ちていってしまった。

落ちる、落ちる。
真っ暗で、上下の感覚もなく。
音さえしない。

漆黒に包まれる世界で、落ちているという感覚だけが、妙にリアルに体を覆う。

恐怖によって引きつった喉は、音を発しない。
暗すぎで、目を開いているか、閉じているかすら判らない。
落ちる、落ちる。
その感覚だけはっきりしていて、どうしようもなく、どこまでも落ちて行く気がした。

ああ、死ぬのか・・・

つぶやきは、引きつった喉では発せられぬまま消えた。
あきらめにも似た感情を抱き、身を委ねる。

そして、意識も真っ暗に落ちていく・・・・。

ゴメンナサイ・・・

何かを掴む様に伸ばしたままの右手に、何かが触れて。

ゴメンナサイ・・・

小さな声が聞こえた気がした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2488x/

未来ある明日へ～求める者～

2012年1月8日02時48分発行